SOMESAT のこれまでの進捗報告、情報共有、書類管理体制について

14/7/16 hem

1. 始めに

SOMESAT プロジェクトを進めるうえでの困りごとについて検討した結果、

（1）報告が上がってこず、今だれがどのようなことをしているかがわからない（報告基準がない）

（2）情報共有手順が定まってないため、誰もどのように共有すればよいのかわからない（共有手順がない）

（3）組織としてこれまでの進捗をまとめておらず、新しく来た人や外部に対して説明できる状況にない（体制がない）

という 3 点が挙げられた。

⇒なぜ、このようなことになったのか？

2. 原因の究明

（1） 報告基準がない点について

①プロジェクト開始当初より、報告基準について各自の判断に任せてきた

②報告基準を設ける試みが無かったわけではないが、いずれも定着しなかった。

③定着しなかった原因はア）いずれ定まるという見通し イ）途中からの着手したものの自然消滅

（2） 情報共有手順がない点について

①かつて情報共有の試みはなされてきたが、十分機能してきたとは言い難い

②情報共有手順が定まってこなかった原因はア）自分がわかればよいという意識 イ）他人に見せられる段階まで出さない意識 ウ）進捗把握のための情報共有の必要性が認識されないなど

（3） 情報管理体制がない点について

① 報管理体制については、これまで各自の自主管理任せ

② 無い原因はア）開発の個人依存体制 イ）管理要員不在 ウ）環境不足

③ 基本的に、SOMESAT はその当初よりマネジメント・組織化を試しては失敗を繰り返している

（4） 補足

これらの 3 点に共通する原因として

「SOMESAT は基本 web 上しか交流手段がなく、バックレればそこまでの関係であることから、各自に対する義務付けや拘束力が弱くならざるを得ない事」

「固定した拠点がなく、物理的に情報を集積できる場所が存在しない事」

など、SOMESAT の成立スタイル自体がボトルネックになっている点については留意する必要がある。

3．MTG の意見や資料への意見

（1）「個々人が活動しているだけなのは組織崩壊だ」という点について

もともと SOMESAT は当初からマネジメントと組織化に失敗しており、組織として死んだのではなく流産を繰り返している。

原因としては

（ア）「各人が自分の分かる範囲で能力を発揮し、それが協調しあう事で事が進んでいく」というある意味楽観的、かつ無計画な状況から発足していること

（イ）進捗を共有蓄積し、目標に向けて調整する土壌が育たないままであること

（ウ）ネット上の交流メインである以上、強制力が実際に集まるより弱いことは把握しており、また各個人のインセンティブが「自分の作ったものに対する反応」であることは再三提示されていたにもかかわらず、これらの特徴を踏まえた組織化や知識の蓄積に向けるための試みがなかったこと。

（エ）マネジメント担当要員が結局決まらなかったこと。連絡調整役を務めきれる人材がいなかったこと。

（2）「SOMESAT として管理する書類が」そもそも無いからほとんど問題ない

「SOMESAT の書類はこれまで自主管理」だった都合上致し方ない。

MTG 内でも出た通り、管理する書類について定めれば、この問題は解決すると考えられる。

（3）ドキュメントを残すための仕組みづくりについて

＞「テンプレがあれば書く」

＞「書く」と言うより「書こうとはする」

仕組みづくりについては、二つのアプローチがあり、どちらも何度か試されてきた。

①誰かがドキュメントを残す担当になり、必要と思われる情報を各人に取材しながら収集する方法

メリット:特定人の一貫した視線を持って情報を収集、取捨選択できる

デメリット：個人依存のため、燃え尽きたら終了。また、取材者の苦手な分野などによる情報量の歪みも出やすい

過去の例：MTG のまとめ（最初期有った）、広報による wiki への進捗掲載

②ドキュメントを残すための様式を準備し、該当する行為を行った人間が様式にのっとって記入、提出する方法

メリット:様式にのっとって書けば、常にある程度の情報を伴った記録が蓄積されてゆく

デメリット：本当に書いてくれるかわからない。書く人のリテラシーが低いと様式で想定した情報すら手に入らない

過去の例：報告フォーマット、イベント出展状況まとめ

どちらもメリットデメリットはあるので、両方を都合のいい場所で使っておくのが妥当。

・残すドキュメントの性質と残し方はリンクして考えたほうがよいのでは？

通常想定する「組織として残す書類」は大方終わった後の報告書として規定される。これらについては様式を想定することもできるし、各担当者が様式にのっとって作ったものを各人が一緒で確認する方法が使いやすいかと。

一方、これに至らない範囲の報告（たとえば、毎週の進捗報告や、各種イベントの現在の準備状況など）は、最悪、最新の記録だけ残れば良い。最悪たとえば直接の担当者以外は外部向けの報告をまとめる人間がいて、その人が担当者の関係者向け報告に自分の視点から必要と思ったことをいくつか確認して+αしたものを掲載するだけで十分かもしれない。

（4）　マイルストーンについて

＞　達成したマイルストーンをまとめてあれば競争原理が働く「かもしれない」・・・

過去の例：超電磁 P の WBS、ezshooter 案

進捗状況報告の根幹にマイルストーンがあると、

① 進捗状況が非常にわかりやすくなり、

② 手つかずの分野が可視化されると新人さんが来た時の説明補助に役立つ

と競争原理のみならず、開発におけるドキュメント管理、進捗管理と全体において好影響をもたらすと考えられる。